写真１　砂丘の頂上に立つサンセットタワー

写真２　２枚の腐植土の様子

ポンポコ山は能代砂丘の基準となる砂丘

当連載第12回に地名「十八石」の謎と題して砂丘の話を載せましたが、その中で昔、地域の人たちが飛び砂（飛砂）の被害に苦しんだらしいことを紹介しました。このような話は八峰町八森地区の集落「古屋敷」にもあり、ある時期にあまりにも飛び砂がひどく、そこの住民は現在の八森第三集落の一区画に移り住んだといわれていて、そこを「新屋敷」と呼んだと聞いています。

一方能代市清助町に建てられた家のつくりは特殊な構造をしており、出入り口の戸は蝶番（ちょうつがい）を使い内側に開く造りになっていました。これは飛び砂で一夜のうちに戸が埋もれてしまうことがあり、もし戸を外側に開く構造にすると戸が開けられなくなるからだ、と聞いています。

八峰町でみられる飛び砂が積もって出来た丘（砂丘）は能代市から更に南に延び、三種町を経て男鹿半島の付け根にあたる宮沢海岸付近まで総延長35㎞も続いています。この一連の砂丘を「能代砂丘」といいます。

能代砂丘は北部、中央部、南部で分布の様子や形がかなり異なっていて砂丘の分類や形成年代を統一するのは基準となる砂丘が必要になります。ポンポコ山の砂丘は「基準となる砂丘」にぴったりなのです（図１）。

東西方向にポンポコ山を切ると？

写真１は図１中の６の位置から８の位置に建っているサンセットタワー方向を撮ったものです。また図１を注意深く見ると、地下に１本か２本の点線が引かれていますが、この位置にはクロズナとか黒色土とかと呼ばれる腐植土層があります。写真２は図１の５の付近を撮ったものです。黒く見える地層が腐植土層です。

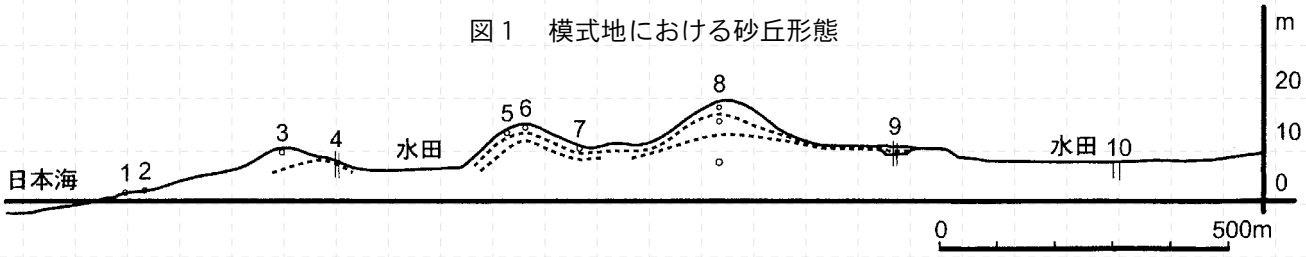
飛び砂が収まって砂が飛んでこなくなると、砂丘の表面に植物が生えだします。その植物が枯れると植物が分解され、砂の中に混じって土が出来始めます。このことが毎年毎年行われると、ついに腐植土層ができあがるという訳です。

海岸に最も近い低い砂丘（図１の３）には腐植土層が１枚、他の二つの砂丘（図１の６、８）には２枚の腐植土層がありますが、このことはポンポコ山一帯では飛び砂があった時期は３回、砂の飛ばない静穏な時期が２回あったことを意味します。

現在は静かな時代に入っていますが、大昔は八峰町のみならず秋田県ひいては日本海沿岸地域全域で、飛び砂に悩まされていたことでしょう。

八峰白神ジオパーク推進協議会
会長　工藤　英美
〒018-2612
秋田県山本郡八峰町八森字ノケソリ116
旧岩館小学校内
TEL 0185―78―2427

図１　模式地における砂丘形態



1　海岸（水の作用による）　2　海岸（風の作用による）　3　外列砂丘頂上　4　外列砂丘風下
5・6　内列砂丘Ⅰ　7　内列砂丘Ⅰ風下　8　内列砂丘Ⅱ　9　遺跡
10　沖積面でのボーリング位置